

俳句日記 2019-2020

この戸建て団地に住み始めてから四十六年。
早いものです。少子高齢化が進んでいます。

ウォーキングに出かけようと外に出ると、見事
な月が西の空に出ていました。



鴻風俳句教室新年一月句会（4句）

年新た白寿の義母の挨拶で

福の神また通り過ぐ大晦日

ストロブでコッペパン焼く昭和かな

鶴鴿の細き足踏む冬野かな

野仏に誰か供へ鏡餅

眠れぬ夜初夢を見ごとくもなく

初空に月と金星輝けり

室咲きの花満開の我が家かな

いつまでも妻が友達おでん鍋

二月

鴻風俳句教室二月句会（4句）

節分や父の声まね福は内

楽しみは朝の散歩の冬景色

水仙をお地藏様のかんざしに

冬董小さな肩を震はせて

鴻風俳句教室三月句会（4句）

啓蟄や土弾き蟻這ひ上がる

三月や奇跡の松に思ひ馳せ

今年また小さき庭に梅笑ふ

車窓にもぽぽぽと桜咲く

三月

石鯛をくろけて使ふ春の宵

孫帰る少し淋しき梅の花

梅笑ふ孫の頭にぎりふたつ

平成の讓位寂しき四月尽

氷雨降り氷の座布団庭に敷く

四月

鴻風俳句教室四月句会（4句）

ふじきとは四方八方春の山

過去未来間に生くるヒヤシンス

極上のロールキャベツは春キャベツ

~~~~んぼ肩をよせ合ふ家族かな

春雨に~~~~り濡れるフリージャー

眼鏡紐つけて~~~~る春深し

春深し5Gをゴージャーと言ふ

五月

ながらうば昭和平成令和かな

真つ白な紙一枚の令和かな

ながらうば昭和平成令和明く

屋台酒ビルの谷間に初夏の月

友釣の囀を放す父の夏

風に乗り北へ北へと花便

吉野山奥千本も散り初むら

Aーに恋の手ほどき夏休み

友達のままげと言はれ五月雨

筍や孫の進路は救命士

鴻風俳句教室五月句会（4句）

見えぬ敵杉か檜か花粉症

茅葺きの長き縁側八十八夜

初夏の海猫が総理の島おこし

貝掘りや孫の見つめる桜貝

六月

鴻風俳句教室六月句会（4句）

手作り自治会主催夏祭

この道や行く人ひとり夏の暮

父の日やお（やれステテ履いてみる

乳飲み子の深き溜息梅雨に入る

天と地と水が育む早苗かな

亡き母の面影偲ぶ花菖蒲

鴻風俳句教室七月句会（4句）

山羊が食む草の匂ひや半夏生

池辺り地蔵に出会ふ梅雨晴間

除草剤撒いて立去る義母の家

花菖蒲小首か（げる母に似て

八月

人生で初収穫の胡瓜かな

半夏生一日遅れで蛸を食ふ

鴻風俳句教室八月句会（4句）

氷屋の一刀両断大暑かな

人生を上手く泳げぬ水馬

西瓜食べ家族団欒昼休み

食事拒否義母の心や梅雨深し

向日葵や顔を背ける奴もいつ

蝉や蝉何故にそんなに鳴き（きこる

夏惜しむふたかみ山の雲の舟

向日葵や皆うなだれて夏惜しむ

盃蘭盆会母の句集を開きたり

盆僧の短きお経孫のマニキュア

ありがとう席譲られて秋うらら

秋の薔薇毎年吾に会ひに来る

九月

蝉の声いっ／＼か消えて川の音

鴻風俳句教室八月句会（4句）

秋めくや電柱の影薄くなり

行き合ひの空ゆつ／＼と雲の舟

ソーラン祭り影も一緒に踊りけり

背番号4孫の雄叫び天高し

ゴキブリや何の因果で迷ひ出る

九月句会投句

秋めくや電柱の影薄くなり

行き合ひの空ゆつ／＼と雲の舟

ソーラン祭り影も一緒に踊りけり

背番号4孫の雄叫び天高し

十月

十月句会（4句）

秋深し母の句集を開きをり

看取りてふ言葉ありけり神の旅

無花果や乳兄妹がると言ふ

もつれ合ひ上へ上へと秋の蝶

十一月

十一月旬会（4句）

無住寺に落葉の絨毯赤黄色

風に揺れとぼとぼとぼと冬の蜂

繕ひて糸切る妻や冬に入る

時雨忌や野飼の山羊の姿消ゆ

大婆にも晴着見せばや七五三

立冬や大和三山凜とて

思つども帰れぬ昔帰り花

十二月

十二月旬会（4句）

すきとぼろふろふきだいてあ（あがれ

無信心終弘法南無大師

スーパ―へ歩いて二分年の暮

忘年会白寿の義母のカスタネット



わが所に冬満月の沈みけり



冬の霧幽かに鷺の影絵かな



一月（令和二年）

亡き父に背中の似たり冬堇

二月句会（4句）

つらま〜妻と二人で鬼は外

子の仕草ふと我に似て冬堇

坊ちやん湯一期一会の遍路かな

手をつなぎ孫と見上げとんと焼

夕刊の届く音して雨水かな

三月句会（4句）

淋しいと妣の電話や雛あられ

生と死のはざまに浮かぶおぼろ舟

ホタルイカ光る目玉の酢味噌和へ

春灯や孫の忘れ（玩具で遊ぶ

四月

屁をひねり一人で笑ふ春の夜

四月句会（4句）

わがままな妻と見上ぐる桜かな

仏生会大日如来吾にあり

無念やなコロナ蔓延春に死す

一歩ずつ散歩の日々や風光る

大和俳壇投句

花粉 窓檜に罪はなけれど

掃除機の音も軽やか春の朝

豆入りの卵焼きから春の色

人は皆コロナに見えて昭和の日

五月

五月句会（4句）

子や孫に会へぬ今年の立夏かな

薰風やパン一つ持ち旅に出る

伽羅落や母の涙かみぬめる

天国の母に供へるカーネーション

六月句会（4句）

總理からマスクの届く薄暑かな

草むしり粟粒ほどの飛蝗跳ぶ

夏の空昭和のおやつパンの耳

夏立つや義母が手を振る窓遠し

七月

七月句会（4句）

夕焼を犬と眺めろ昭和かな

梅雨空や今日一日に活を入れ

夏休アイスクリンと父の言ふ

草の葉にお前居たのか糸蜻蛉

八月

八月句会（4句）

空蟬は土の匂ひを纏ひけり

逆上がり出来た夏の日鉄の味

誰がために経を唱つゝ法師蟬

糸のやうにキャベツ切りたり妻の技

九月

ああ言つばこ言ふ妻と五十年

九月句会（4句）

岳蹴の岳ひとつあり路地の月

田の神の稲穂を撫でる散歩道

蘇る父の笑顔や西瓜食ふ

松茸や匂ひもせずに通る去り

霧の海ふたかみやまの浮かびをり

敬老の日孫から貰うストラップ

リモートで介護認定秋深し

これ見てと母の俳句や菊日和

十月

十月句会（4句）

感染の数字を睨む夜長かな

岡山の孫の素振や秋の風

呼び合ひて鶴の番の飛び去り

ちちははの道を辿るや秋彼岸

自転車のチューブの泡や路地の月

うろく雲魚の名前問ふ、問ふ

樂し世や糖質ゼロのビール飲む

竜胆や母の命日経を読む

影踏みの影鮮やかな今日の月 大和俳壇特選

秋暁の山並み赤く紅を引き

「刺身でも」に釣られて秋刀魚買ひにけり

一匹の秋刀魚を妻と分けにけり

淡き夢ふうせんかづら風に揺れ

地べた這ふ松葉牡丹や天高し

咲き誇る光静かな冬堇

四十年（よそとせ）の梅伐採す暮れの秋

十一月

十一月句会（4句）

人生は尻切れとんぼ落葉舞ふ

耳澄まし雨の音聞く夜長かな

すく〜りと光り静かな残る菊

躍り出る孫の壁紙運動会

晩秋の静かな祈り正倉院展

逆剥けの人さし指や冬隣

暖かや吾も消え去る冬の霧

山眠る雄岳雌岳のこ上山

一本の寒菊揺れる憂国忌

十二月句会（4句）

一人鍋いっ（かそげに妣<sup>はは</sup>がゐて

灯油買ふ地球温暖化憂ひつつ

第三波震える街の師走かな

冬の霧一間先の無明かな

もう飛べぬ冬のバツタの複眼、

冬の田に幻の牛放しけり

日向ぼこ仏も人も隔てなく

補蔵寺の門を叩かん冬の風

冬の夜の夢を吸い取る枕かな

マリ投げる女と犬の枯野かな

かららげの玄関広し年始